兵庫県立芸術文化センター

ピッコロシアタープロデュース
兵庫県立ピッコロ劇団
第42回公演

劇場版 日本三文オペラ

芥川賞作家・開高健の傑作小説、快心の舞台化！

"今日生きるためなら何でもやる、何だって喰う!!"
荒廃した戦後の大阪。
爆撃で壊滅した兵器工場跡地で
鉄クズを漁って売りさばく巡礼集団「アパッチ族」。
猥雑でしたたかに生きる人間群像を
関西弧縦の俳優陣がエネルギッシュに活写する！

原作◎開高健
脚本・演出◎内藤裕敬

■スタッフ
美術◎加藤登紀子
照明◎島袋鉄郎（ペルソナ・プロジェクト）
音響◎藤田辰也
音響◎Atsu Nouveau
舞台監督◎中村洋一（ピッコロ劇団）
舞台監督◎鈴木田聡一（ピッコロ劇団）
舞台監督◎大段清恵子（ピッコロ劇団）
舞台監督◎高原礼子、政畑晋沙（ピッコロ劇団）
舞台監督◎山本由利子（ピッコロ劇団）

■出演者
荒谷清水（劇団天乃原一座）
石本徳恵（ピッコロ劇団）
今井佐知子（ピッコロ劇団）
今仲ひろし（ピッコロ劇団）
榎本祐希（劇団四季）
太田清伸（劇団四季）
大塚雄也（劇団四季）
岡田　力（ピッコロ劇団）
樫村千晶（ピッコロ劇団）
金久美章（劇団四季）
亀井妙子（ピッコロ劇団）
加門　功（ピッコロ劇団）
北嶋剛士（劇団四季）
木全晶子（ピッコロ劇団）
こんどう けいいち（演劇集団 プレッシャーズ）
阪上洋光（劇団1・2・3カンパニー）
篠浦ことえ（空間芸術劇団）
鈴木英之（劇団四季）
鈴村貴彦（劇団四季）
角　朝子（ピッコロ劇団）
孫　高宏（ピッコロ劇団）
竹内宏樹（劇団四季）
橋　義（ピッコロ劇団）
田中よし子（ピッコロ劇団）
谷奥弘貴（劇団四季）
道幸千紗（劇団四季）
野秋裕香（ピッコロ劇団）
濱崎大介（ピッコロ劇団）
原　竹志（ピッコロ劇団）
平井久美子（ピッコロ劇団）
福重　友（劇団四季）
藤枝恭平（ピッコロ劇団）
堀江真気（劇団四季）
増井友紀子（劇団四季）
峯　素子（劇団四季）
森田真和（劇団ロイヤルハム）
森　万紀（ピッコロ劇団）
森　好文（ピッコロ劇団）
山口清由（劇団四季）
吉江麻樹（ピッコロ劇団）
よしひろ（ピッコロ劇団）
吉村祐樹（ピッコロ劇団）

2012 2/23(木)→26(日)

	23(木)	24(金)	25(土)	26(日)
2月		●	●	●
7月	●	●	●	

兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール
〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22 阪急西宮北口駅南改札口スグ／JR西宮駅より徒歩約15分（阪急バス約7分）

一般発売 12/11(日)
全席指定(税込) 一般 4,500円 大学生・専門学校生 3,000円 高校生以下 2,500円
主催：兵庫県立尼崎青少年創造劇場　兵庫県・兵庫県立芸術文化センター　協力：NPO法人関西健記念会／大阪市立大学同窓会連絡会
後援：サンテレビジョン
○お問い合わせ 兵庫県立ピッコロ劇団 〒661-0012 兵庫県尼崎市南塚口町3-17-8
06-6426-1940・8088(劇団電話) http://hyogo-arts.or.jp/piccolo

兵庫県立ピッコロ劇団

全国初の県立劇団"兵庫県立ピッコロ劇団"は、兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）が長年培ってきた人材育成事業の集大成として1994年（平成6年）に創立されました。
2009年度より、日本の演劇界を牽引する創作家・岩松了氏を劇団代表に迎え、全国公募により選ばれた劇団員35名とスタッフとが力をあわせ、公演活動をはじめ学校や地域での演劇指導・普及活動にも積極的に取り組むなど、"芸術県ひょうご"を目指して、日本全国から海外にまで幅広く活動を展開しています。

1998年 文化庁芸術祭賞（演劇部門）芸術祭優秀賞、第32回紀伊國屋演劇賞団体賞、尼崎市民芸術賞
2008年 文化庁芸術祭賞（演劇部門）芸術祭優秀賞 ほか

演劇公演
2012 4月 ピッコロシアター・ホールホール　オフシアター vol.26 早船 聡 書き下ろし 演出◎吉村祐樹
2012 6月 ピッコロシアター・大ホール　第43回公演「博多小女郎波枕」 原作◎近松門左衛門　脚本・構成・演出◎鵜下辰男

ピッコロサポートクラブ会員募集中！
ピッコロ劇団の公演へのご招待や割引、
劇団員との交流会など、お得な特典がいっぱい！
どなたでも、いつからでもご入会いただけます。
詳しくはピッコロ劇団へ　TEL.06-6426-8088

兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール

全席指定(税込) 一般 4,500円 大学生・専門学校生 3,000円 高校生以下 2,500円
※未就学児の入場はご遠慮ください。※やむを得ない事情により出演者などが変更となる場合があります。あらかじめご了承ください。

チケット取り扱い　12月11日(日)一般発売
芸術文化センターチケットオフィス
0798-68-0255 10:00～17:00 年末年始休み、祝日の場合は翌日 ホームページ http://www.gcenter-hyogo.jp
芸術文化センター会員電話予約受付開始 12/8(土) ※窓口での販売（残席がある場合）は12/13(火)より
ピッコロシアター
06-6426-1940 9:00～21:00 ※月曜休み、祝日の場合は翌日
ピッコロサポートクラブ会員 先行予約受付開始 12/8(土) ※ピッコロサポートクラブ会員は、会員専用コードにて応席または割引 ※ピッコロサポートクラブ会員予約および一般コンビニチケットの本取り扱い。
○チケットぴあ 0570-02-9999［Pコード：416-020］ ○ローソンチケット 0570-084-005［Lコード：52639］
○阪急西宮北口駅南改札口 スグ（連絡デッキで直結）
○JR西宮駅より徒歩約15分（阪急バス約7分）
※ご来場は、電車・バスなどの公共交通機関をご利用ください。
○塚口さんさんタウン（3番館1Fインフォメーション）

TAKESHI KAIKO 開高健 原作

PROFILE
1930年（昭和5年）、大阪市天王寺区生まれ。
大阪市立大学卒業後、1954年寿屋（現サントリー）に入社し、宣伝部で勤務。PR誌「洋酒天国」の編集やウイスキーのキャッチコピー（トリスの「人間らしくやりたいナ」など）を手がける一方、小説の執筆を開始。
57年に発表した「パニック」で認められ、翌年発表した「裸の王様」で第38回芥川賞を受賞。59年に「日本三文オペラ」「洪仁記」など、その後次々に話題作を発表する。
60年代になってからは、しばしばベトナムの戦場に赴き、その凄烈な体験をもとに「輝ける闇」「夏の闇」「花終わる闇」の3部作が書かれた。食・酒・釣りに関するエッセイも多数。
79年「玉、砕ける」で第6回川端康成文学賞、81年一連のルポルタージュ文学により第29回菊池寛賞、87年自伝的長編「耳の物語」で第19回日本文学大賞など受賞多数。
89年（平成元年）12月9日、食道癌に肺炎を併発し逝去。北鎌倉・円覚寺松嶺院に眠る。
死後、業績を記念して開高健賞（1992～2001TBSブリタニカ ※現・阪急コミュニケーションズ）、開高健ノンフィクション賞（2003～ 集英社）を創設。
後平生の16年を過ごした神奈川県茅ケ崎市に開高健記念館が開設されている。

開高健と大阪

藤本義一（作家）

この作品の舞台は、大阪の下町である。今でこそ、京橋や新世界は観光でも訪れる場所だが、戦後のこの辺りは、雑多な人間が集まり、生活をしていた。その様子を、まざまざと描いて生々しい。ジャンジャン横丁のもうもうとした匂い、主人公フクスケの悪臭、マッカリ放つ、混ざり合った匂い。そしてアパッチ族が食っているホルモンの匂い。本の中から、匂いが、そして汗までもが伝わってくる。どん底の民衆を描いているにも関わらず、こんなにも軽快に読み進められるのは、ひとえに開高氏の筆力によるものだが、そこに故郷・大阪への愛しさを感じる。大阪の匂いが、味が、体に棲みついた開高氏が想像出来る。
開高健氏は、昭和33年に「裸の王様」で芥川賞を受賞して新進作家として注目を浴びたとたん、ノイローゼ気味になり居を移した東京から大阪に帰って来た。憂鬱から逃るためアパッチ族を調べはじめ、深く関わっていくうちに気分も晴れていったと自身のエッセイで語っている。息を吐くために、大阪の、中でもアパッチ族に興味をそそられるというのが開高氏らしい。開高氏は、やはり、大阪が似合うのである。

HIRONORI NAITO 内藤裕敬 脚本・演出

PROFILE
東京内万歳一座・座長。1959年栃木県生まれ。79年、大阪芸術大学（舞台芸術学科）に入学、80年、東京内万歳一座を「結成」（作・唐十郎／演出・内藤裕敬）で旗揚げ、以降、全作品の作・演出を手がける。
現代的演劇の表現を主旨とし、常に現代を照射した作品には定評があり、劇団外での作・演出も多数。世界的なアニメ・映画監督たちの音楽・演劇のコラボレーション公演も好評で、「雲の彼方へ」（2012年2月にピッコロシアターでも上演予定。2000年OMSプロデュース／ここからは遠い空）（作・鈴崎正裕）演出で、読売演劇大賞・優秀演出家賞受賞、著作に「内藤裕敬・劇風詩人さき」（内藤裕敬・岩女真吉共著）、「青木さん家の奥さん」がある。

過去二度のテント公演、一度の倉庫公演には、それぞれ理由があった。一度目は、押さえきれない若さの好奇心と冒険心からのテント公演だった。また、大阪初のキャッツシアターに挑戦したい上演とオレンジルームの開館、そこから巣立った演劇仲間との対決。二度目は、原作の舞台・京橋での上演とオペラシアターの開館、そこから巣立った大阪の迷路館の劇場開館とウルトラマーケットの旅立ち。
もう上演の機会は無いだろう…、実は内心そう思っていた。しかし今回、劇場版としての改作に大きな興味を感じた。原作を読み直した。群衆劇としてのダイナミズムを残しながら、登場人物の内面にも深く踏み込む群像劇へと劇場で息を吹き込まれないものか。
血と肉で考えて、完成度を上げる書き直しとした。

〈過去の上演〉
1986.4 テントひろば公演　テント公演新宿百人テント
1989.4 テントひろば公演　テント公演新宿百人テント
1991.3 ドキュメンタリー・ドラマ「ものがたり」
1993.3 南河内万歳一座・天王寺公演所公演劇場ロイヤルホール

ものがたり

現在の大阪城ホール周辺に、
日本最大の兵器工場・陸軍砲兵工廠があった。
しかし、昭和20年8月14日、終戦の前日、
自殺のすさまじい空襲により壊滅。
広大な敷地には大砲、戦車、銃弾などの
膨大な量の鉄が残された。
やがて朝鮮戦争が始まると、鉄の値段は急騰。
鉄クズという名の宝物を探しまわる連中が
この地に集まって来る。
夜な夜なこの国有地に忍び込み、
綿密な作戦と組織力を駆使して
警察を欺目に国有財産である鉄を運び出しては、
売りさばくトロギー集団。
彼らは「アパッチ族」と呼ばれた。
腹をすかせ、新世界界隈をうろついているフクスケは、
見知らぬ女に呼びとめられ、
モウ弁をおごってもらったのと引き換えに、
キム親分率いるアパッチ族の手伝いをすることになる。
そこは、名前も素性も知れない
肉体と頭脳を結集し、
ただ一食ある「ためにがしゃらに鉄クズにへばりつく、
酸素とエネルギーに満ちた世界だった。
やがて、大きな獲物をめぐって情報が錯綜し始め、
組織の統制は崩壊していく。